

入野小学校

生きるための「実力」を
身に付けた児童の育成

校長 二岡 裕幸

◆はじめに

今年度19名の新1年生を迎え、本校では現在143名の児童が在籍しています。教職員数は20名です。

児童も教職員も（保護者も地域も）「今日も学校に来て（行かせて）よかった。明日も学校にきたい（行かせたい）」。そんな学校をめざし学校経営を行っています。毎朝、子どもたちが登校する姿を見守るとき、私自身「今日も学校に来てよかった」と思う瞬間でもあります。

また、「地域を学びの場」と位置づけ、生活科や総合的な学習の時間では、児童が自ら課題を見つけ探究的な学習を行っています。

これまでも、地域の皆さんには、児童の設定した課題をもとにした情報収集や体験的な活動にたくさんご協力いただきました。

今年度も、各学年で「黒潮町」にこだわったテーマで学びをスタートしている

ので、児童が自ら設定した課題の解決に向け情報を集めたり、教えていただいたりするために地域の皆さんにご連絡をさせていただくこともあろうかと思いますが、何卒ご協力をよろしくお願いします。

◆取組

▼学校教育目標

「生きるための『実力』を身に付けた児童の育成」

児童が大人になったときの姿を見据え、自らの幸福の追求と社会への貢献ができる「生きるための実力」を身に付けさせるため、「今」付けるべき資質・能力の育成に向け、「チーム入野小」として、家庭・地域との連携のもと、一丸となって取り組む学校をめざしています。

その目標に向け、重点的に付けたい力を今年度も以下の「3つの力」として、児童とも共有し、私たち教職員は常に意識しながら教育活動を行っています。

①自ら考え、判断し、行動する力

②他者と協働（他者とコミュニケーション）することができる力

③見通し・計画を立てることのできる力

▼校内研究主題

「自ら問いを見出し、学習活動を楽しむ授業づくり」
「算数科の授業づくりを中心にして」

今年度は算数科を中心に、身に付けた力が他の教科や領域、実生活に結びつき児童自身の「実力」となるような授業づくりをめざしています。

児童一人ひとりが自ら「問い」を見いだし、解決するために計画を立て、探究し、振り返りを行うという一連の学習活動が主体的に行えるような授業を創造していくために、研究を行っています。

◆学校行事など



春の「新入生歓迎遠足」から始まる全校で取り組む学校行事の紹介です。

今年度の遠足はあいにくの雨となり、校内での活動となりましたが、児童会を中心とした上級生の温かい歓迎の気持ちで全面に表れた新入生歓迎レクになりました。

5月開催が定着してきた「大運動会」では、1年生は入学して間もない中、また全校児童にとっても限られた準備期間の中で、しっかりと練習に励み大成功をおさめました。運動会では、地域・保護者の皆さんにも大変お世話になりました。

6月には学校プールにおいて、各学年で水泳授業も始まりました。水泳授業では泳げるようになるための指導だけではなく、水難事故から自分の身を守るという視点も大切に行っていました。

運動会でも水泳授業でも、最近では熱中症にも配慮しながら子どもたちと楽しく進めていきました。

◆おわりに

本校では従来よりさまざま

な活動を縦割りの「仲良し班」で行っています。日々の清掃活動や、遠足などの活動もこの「仲良し班」で行動していきます。

児童たちそれぞれ、休み時間には、上級生はいつも下級生のことを思いやり、また下級生は上級生を慕って遊ぶ姿が見られます。

今年度より田ノ口小学校が休校になったことに伴い、上田の口、下田の口、馬荷、御坊畑も校区となりました。

このような温かい関係性が、より広くなった入野小学校の児童に今後もずっと受け継がれ一人ひとりが豊かな学校生活を送れるように今後も取り組んでいきたいと思っています。



三浦小学校

「自主・自律から」

協働・共生へ」

校長 明神 通恭

最近、朝夕やつと涼しくなつて、草の陰から虫の声がひそやかに聞こえています。8月17日から再開した放課後子ども教室を覗いてみると、子どもたちが「校長先生、宿題あと少しになったで」「私もあと工作だけ。えらいろうう？褒めて」と賑やかに声をかけてくれます。

新学期を心待ちにしている子どもたちを見てみると、子どもたちにとって「学校」は本当に大切な「居場所」なのだとならためて確認させられたことでした。



さっそくですが、三浦小学校の令和8年度の主な取り組みについて少し紹介させていただきます。

◆学校教育目標

「自分で、できる 仲間と、できる」の徹底

子育ては教職員だけの力では成立しません。大切なのは子どもを中心に据えて、それに関わる大人がベクトルをそろえて協働することです。

そこで、今年もPTAと三浦の子どもを育てる会（コミュニティスクール）に対して、教育によってめざすべき方向性を次のように説明しました。

▼「自主・自律から協働・共生へ」（教育の方向性）

①自主・自律とは「自分のことは、自分でできる」ということ。

②協働・共生とは「誰もが自分のよさを生かして活躍しあえる」ということ。

子どもたちの生きる未来は予想もつきません。そんな未来を生きる子どもたちだからこそ、誰かが掃き清めた道をただ進むより、舗装されていない凸凹の道を切り開き、転んだり迷ったりしながら歩んでほしい。子どもたちには誰の力も借りずに一人でじっくり考え

てみたり、みんなと一緒に頭を突き合わせて考えをおつけあったり、そんな時間を思う存分過ごしてほしいと思っています。

そのための私たち大人の役割は「子どもたちに工夫や苦勞をさせること、子どもたちの学び育つ姿を見守って、挫けそうなどときには少し励ましたり、勇気や自信を無くしているときには立ち上がれるように傍に寄り添ったりすること。簡単に答えに導いて子どもたちの考える楽しみを奪ってしまわないようにすること」です。

一生懸命頑張る自分たちを、見守る大人がいることで、子どもたちは安心して力を発揮します。これからもちょうどいい距離感で見守っていききたいと思っています。



ジョブなしろ・生華園の方との田植え

▼「牛の尻尾にならない」から「自分のものさしを磨く」へ

令和5年度赴任当時は自己表現が苦手な子どもが多く、周囲に遠慮したり、自分で「無理」と限界を決めたりして、一歩前に踏み出すことができない子どもも多かったです。このため「自分の進む道を他人任せにしない。自分で決めてそれに向けて努力してほしい」という思いを込めて「牛の尻尾にならない」と訴えました。

以降3年半、本校では一貫して、あらゆる教科や教育面で目的のある言語活動を行い、自分の考えや思いを根拠をもって説明する力を育んできました。今年、4年目を迎えた対話型授業・対話型鑑賞の取組が実を結んで、間違いや失敗を恐れずに自分の意見や感想を言言できる子どもが増えてき



1年生の対話型授業

たように思います。

しかし、未だに弱さが見られるのは相手の話を丁寧に傾聴したり、慎重に観察することで情報をより深く読み取ったりする力です。これらの力を伸ばすためには、寛容な姿勢と批判的思考を鍛える必要があります。人は物事を当たり前と思ったり、逆に常識はずれと決めつけたりしてしまった時点で、新たな視野を得る機会を失います。無理や無駄、不合理など遠回りすることで見えてくる価値があります。これらを意味のないものとして切り捨てることなく、「自分のものさしを磨いて」「見つめなおしてもらいたい。そして、物事の本質を見抜く眼を鍛えてほしい」と思っ、子どもたちに訴えてきました。この点は、私たち教職員も、日々問い続けていかなければいけないことです。

激しく変化する社会の中で本質を見失わず、さらに、既存の価値観に安住するのではなく、新たな価値を見いだす「自分のものさしを磨く」姿勢を子どもと一緒に鍛えていきたいと思います。